日本紀標註

巻之十二

和書門
類 四三七一八 號
函 一四三
架 一
冊 二六

内閣文庫
和書
類 四三七一八 號
冊 二六
函 一三七
架 九
(二十六)

内閣文庫
番號 和 43718
冊數 26 (12)
函號 137 99

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

原本巻首ハ日本書紀第十とつて

日本紀標注卷之十二

敷田年治謹注

履中天皇

去來穗別天皇

去來穗別ノ天皇、大鷦鷯ノ天皇、太子ノ也去來、此ニ云ニ伊裝ザト母ニ曰ニ磐之媛命ト、葛城ノ襲津彦ノ女也、大鷦鷯ノ天皇三十一年、春正月立テ爲ニ皇太子ニ、時年十五八十七年春正月、大鷦鷯ノ天皇崩、皇太子

去來穗別天皇ハ、仁德紀ハ、大兄去來穗別ハ作ルヲ、先帝の長子ハ坐ルベ、大凡ル字の如く、去來ヲ率、穗ル大ホタリ、此天皇を後ハ履中と謚奉ルり○諒闇、綏靖紀ハ見をたる○羽

田矢代宿禰も、應神紀ゝ見ゑたり○納采ハ、仁德紀ゝ、納縁をよみ、彼處ゝ注しつ○住吉仲皇子ハ、天皇の御弟○吉日、按ゝ此程既ノ暦日を定ノ給ひし事、此ゝ吉日とゝるゝて、推量をつ、近年上記と云ノ書の出て、其書ゝ、神武天皇前ゝ、暦學の行れし狀ゝ、記せれど、彼

自諒闇出之未即尊位之間、以羽田矢代宿禰之女黒媛、欲為妃、納采既訖、遣住吉仲皇子而告吉日、時仲皇子冒太子名、以姧黒媛、是夜仲皇子忘手鈴、於黒媛之家而歸焉、明日之夜、太子不知仲皇子自姧而、到之乃入室、開帳居於玉床、時床頭有鈴音、太子異之問黒媛曰、何鈴也對曰、昨夜之非太子、

偽書ゝ見ゑたれど、然ゝ欽明天皇十四年紀ゝ、暦本云々可付送の勅ゝるを見て、暦も彼時よりて始ノ事と思へらむ、彼も海外の暦ゝることゝ、彼處ゝ云べし○手鈴、上代も男女とも、手ノ鐶ゝ鈴を著し、万葉十三ゝ、真割持小鈴文由良爾云々○入室も、夜殿ゝて、和名抄ゝ寢殿をよめり○開帳も、戸帳ゝて、和名抄ゝ幌、帷幔也、和名止波利○太子所賞云々、同腹の御兄弟ゝ、容貌相似給ひしゝや物部大前も、宇麻志麻治命、十一世孫ゝして、麥入宿禰之子ゝと、舊事紀ゝ見ゑたり○

所賞鈴乎、何更問妾、太子自知仲皇子、冒名以姧黒媛、則黙之避也、爰仲皇子畏有事、將殺太子、密興兵圍太子宮、時平群木兎宿禰、物部大前宿禰、漢直祖、阿知使主、三人啓於太子、太子不信醉、一云太子、以不起故三人扶太

埴生坂、河内名所図會ニ、丹南郡野々上村の邊を云と記せり○大坂諸陵式ニ、大坂磯長陵、在ニ河内国石川郡ト記し、志ニ在ニ同郡山田村ニとなりて、竹内峠の官道ニて○飛鳥山も、大坂より北ニ當て、遠からぬ所ニ飛鳥村なり○山口とハ、山の登り口ニて、即河内よりあり、古書ニ基山口となるを、總て此例あり、然ルニ諸注大坂も、飛鳥も、大和の地名ニ説れたれ、地理を知ざる誤なり○熟兵者云々、

子令乘馬而逃之一云、大前宿禰、抱太子而乘馬仲皇子不知太子不在而、焚太子宮、通夜火不滅、太子到河内國埴生坂而醒之、顧望難波、見火光而大驚、則急馳之自大坂向倭、至于飛鳥山、遇少女於山口、問之曰、此山有人乎、對曰、執兵者多滿山中、宜廻自當摩侄踰之

今竹内ヲ越て伏村兵家村なり、此の故事ニよりて、名づけしニか○當摩、和名抄ニ、大和国葛下郡、郷名當麻、多以末と注せり、世ニ當麻の觀音と云て、人皆知まり、侄ハ路ニて、古音以て書なり、按ニ直ニ對ひ給ふ方ヲ、伏兵なりまを、左を取て越給へ

於朋佐箇珥ハ、於大坂あり○阿布夜烏等謎烏ヲ、逢哉少女をニて、少女ニと云べきを、如此云ハ古言の一格あり○瀰知度沛麼ハ、道問者あり○哆駄珥破能邏孺ハ、直ニハ不告ニて、直ニとい真直ニハの意ヲ

太子於是以爲、聆少女言、而得免難、則歌之曰、於朋佐箇珥、阿布夜烏等謎烏、瀰知度沛麼、哆駄珥破能邏孺、哆嗜摩知烏能流、則叟還之發當縣兵令從身、自龍田山踰、之時、有數十人執兵追來者、太子遠望之曰、其彼來者、誰人也、何歩

○喙嗜麻知烏能流ハ、告當摩路あり○龍田山ハ、大和国平群郡ホて、此ホ越るを亀瀬越と云、又、是も甚平らかなる山ホいなど、當麻ホ越る順路ホならず、然レど敵を避ケて廻り出坐しホや

行急、之若賊人乎、因隱山中而待之

近則遣一人問曰、曷人且何處往、淡路乃野島之海子乃云々○阿曇連、應神紀ホ、阿曇連、祖大濱宿祢云々、為海人之宰とかれむ、爰ホ海人を率來る濱子ハ、大濱の子ホや○吾子籠も、仁德前紀ホ見ゑ

矣、對曰淡路野嶋之海人也、阿曇連濱子云一云、阿曇連里友為仲皇子、令追太子、於是出伏兵、圍之悉捕得、當是時倭直吾子籠、素好仲皇子、預知其謀、密聚精兵數百、於攪食栗食も、大和志ホ忍海郡薑村の、舊名を云へり○栗林、万葉六ホ、指進乃、栗栖乃小野之芽花云々

林、爲仲皇子將拒太子、時太子不知兵塞而、出山行數里、兵衆多塞不得進行、乃遣使者問曰誰人也、對曰、倭直吾子籠也、便還問使者曰、誰使焉、曰皇太子之使、時吾子籠憚其軍衆多在、乃謂使者曰、傳聞皇太子有非常之事、將助以備兵待之、然太子疑其心欲殺、則吾子籠愕之、獻己妹日之媛、仍請赦日之媛、雄略紀ホ、倭采女日媛

○石上振神宮、式ハ大和国山邊郡、石上ニ坐布留御魂神社、志ハ在ニ布留村一

死罪ヲ、乃免之、其倭ノ直等カ、貢ニ采女ヲ蓋始ニ于此ノ時ニ歟、太子便チ居ニ於石上ノ振ノ神宮ニ、於是瑞ハ歯別皇子、知ニ太子ノ不マシマ在ヲ、尋ヌ之追キタマフ詣、然太子疑テ弟王ノミコノ之心ヲ而不レ嗔、時ニ瑞歯別皇子、令レ謁ヲ曰、僕ヤツカレ無ニ黒キタナキ心一、唯愁テ太子ノ不在一而參キツルノミ耳、爰ニ太子傳テ告ニ弟ノ王ニ曰、我畏テ仲ノ皇子之逆サカサマナルヲ、獨避テ至レリ於此ニ、何且非レ疑ニ汝ヲ耶、其仲ノ皇子在ハ之、獨猶爲ニ我カ病ト、遂ニ欲除ノゾムト、故レ汝ヲ寔ニ勿ニ黒キタナキ心一、更ニ返テ難波ニ而殺セ仲ノ皇子ヲ、然後乃見ム焉、瑞歯別ノ皇子啓テ太子ニ曰、大ウ人シ何ソ憂ヘマスヲ之甚キ也、今仲ノ皇子無アヂキナク道、群マチキミタチ臣及ヒ百姓ナホミタカラ共ニ惡ニクミ怨ウラム之、復其ノ門ヘノ下ヒトモ人、皆叛テ爲レ賊アダト、獨リ居テ之無ニ與トモニ誰ト議ハカリコトヤツカレ臣ヲ、雖レ知ルト其ノ逆ヲ、未レ受ウケ太子ノ命ミコトヲ、之故レ獨リ慷慨ウレタミ歎ノ之耳、今既ニ被カブレリ命ヲ、豈ニ難ニ於殺スラ仲ノ皇子ヲ乎、唯獨リ懼ハ之既殺ト仲ノ皇子ヲ、猶且疑ムレ臣ヲ歟、冀ハ見ウツシマシテ得タマシキヒトヲ忠直者、

慷慨、神武ハウレタキとよめり、アラクも有の延語○見得を、ウツシマシテとよめる

て、移シ増シテり

欲レ明ニ臣カ之不欺ナルヲ、太子則副テ木菟ノ宿禰ヲ而遣ヒ焉、爰ニ瑞齒別皇子、歎テ之曰、今太子ト與ニ仲ツ皇子、並ヒ兄也、誰レカ從ヒ兵誰カ乖カム兵、然レ亡ニ無道ヲ就ハ有道ニ、其レ誰カ疑

消息既ニ注しつ

我ヲ則詣ニ于難波ニ、伺ニ仲ツ皇子之消息ヲ、仲ツ皇子思テ太子已ニ逃亡ニ而無シ備、時ニ有ニ近習サモラフ隼人、曰ニ刺領ヒ巾レト、瑞齒別ノ皇子陰カニ喚ニ刺領巾ヲ、而詐ラヘ之曰、爲ニ我カ殺セ皇子ヲ、吾必敦ク報レ汝ニ、乃脱ギテ錦ノ衣ハカマヲ褌ヲ與フ

刺領巾、記ニ曾婆加理とかゝ

○詐之、万葉九ニ、相ニ詐ラヒ良比、訶成之賀婆云々、是をアツラヒ

とも云へゝ、古今ニ吹風ニ、かつらへ告るものゝ云々○

之、刺領巾恃ニ其ノ詐ヘ言ヲ、獨リ執レ矛ヲ、以伺ニ仲ツ皇子ノ入レ厠カハヤニ、而刺シ殺シ、卽隸ニ于瑞齒別ノ皇子ニ、於是木菟ノ宿禰、啓ニ於瑞齒別ノ皇子ニ曰、刺領巾爲レ人、殺シ已カ君ヲ、其爲レ我、雖レ有ニ大功、於ニ已カ君ニ無レ慈之甚矣、豈得レ生ヲ乎、乃殺シ刺領巾ヲ、卽日向倭也、夜半ニ臻ニ於石ノ上ニ而復命、於是喚ニ弟王ヲ、以敦寵ク仍賜ニ村合ヒ屯倉ヲ、是日捉ニ阿曇ノ連濱子ヲ

錦ノ衣、褌ノ與

ゝ、古今ニ吹風ニ、かつらへ告るものゝ云々○錦衣褌ハ、衣と褌とを給るゝ、神武紀ニ、賜ニ御衣袴ヲとかゝ、褌をハカマとよめるとゝ、神代紀及崇神紀ニ見えたり○村合ヒ、神代紀ニ邑ヲ并田ヲ分れど、此も地名なるべし

磐余を大和国十市郡の地名○稚櫻宮は称たるこ神功紀に都於磐余是謂若櫻宮とありておなじ名ある由古語拾遺に此朝を後磐余稚櫻朝と記せり○即日黥を目前刻しるして此末に飼部之黥皆未差雄略紀に黥入面ふど

元年春二月壬午朔、皇太子即位於磐余稚櫻宮、夏四月辛巳朔丁酉、召阿曇連濱子詔之曰、汝與仲皇子共謀逆將傾國家、罪當于死、然垂大恩而免死科墨、即日黥之、因此時人曰阿曇目亦免從濱子野嶋海人等之罪役於倭蔣代屯倉

墨刑を云々支那国に墨劓剕宮大辟を五刑と云る墨は此黥に同じ原本日を曰に誤れり○阿曇目は、阿曇連の目先を黥たるを其時の人然云々○蔣代屯倉詳ならず此屯倉に役は今云徴役なり

壬子四日○葦田宿禰、記に葛城之曽都毗古之子、葦田宿禰、顯宗紀に蟻臣者葦田宿禰子也、ふどなり、然に皇女集解に一本に據て葉田に作て、且前紀に羽田矢代宿禰之女黒媛を證に取出たり、按に葦田を葉田とせは時に二の不審あり、其一は矢代宿禰の女、黒媛は、仲皇子と新しとせば、然に人を妃とし給むる如何、二は羽田を此末に、羽田之汝妹、推古紀に集に子羽田孝徳紀に、羽田臣、天武紀に、羽田公、持統紀に羽田朝臣ふど、紀中羽田てふる九所出たるに葉田と書たるを、一だに見ざるを、葦を葉に字形似たるを誤りとして、是のを改めむ、理なれども、原本に從ふべし○磐坂市邊押羽皇子の、磐坂を大和志城

秋七月、己酉朔壬子、立葦田宿禰之女黒媛、爲皇后、生磐坂市邊押羽皇子、皇子、御馬皇子、青海皇女一曰、飯豐皇女、次妃幡梭皇女、生中磯皇女、是年也太歲庚子

上郡ニ、岩坂村あり、市邊ハ和名抄同郡ニ、大市上市等の郷名ありて、押羽も記の顯宗段ニ、如三枝押齒坐とあるとて、蘖齒を御名ニ負たるも、原本磐坂上生字を妃ニ誤るなり、集解ニ一本ニ據て改たるニ從ふ○御馬皇子、大和志添上郡ニ、水間村ありて、此地ニ由りて負しかや○青海皇女、一曰飯豐皇女も、御名を二ツニ分たるにて、顯宗紀ニ、忍海飯豐青尊とありて、飯豐も和名抄ニ、鵂鶹をよめるも、彼島ニ由りて、負ひしかや、上代ままこの例多し、式ニ陸奥国白河郡、飯豐比賣神社○幡梭皇女ハ、仁德天皇の御女○中磯皇女を、安康紀ニ中帯姫ニ作るも、名義考へず

己酉四日○磐余ハ上ニ、即位

二年春正月、丙午朔己酉立二瑞齒別皇子一爲二儲君一、冬十月都二於磐余一、

於磐余、稚櫻宮とあるも、素よりも坐し所、即都ふるを爰ニ都於磐余とあるも如何と云ふ、皇居の麗く成整たる時を、如

當是時、平羣木苑宿禰、蘇賀滿智宿禰、宿禰、物部伊莒佛大連、圓豆夫羅大使主、共二執二國事一、十一月作二磐余池一

此記せる、此紀の例ふるをや

○平群木苑宿禰ハ、武内宿禰の長子なる事、上ニ見えたり○蘇賀滿智宿禰、姓氏録ニ、蘇我臣之祖也○物部伊莒佛大連、姓氏録巫部連、饒速日命十世、伊巳布都乃禰公之後也とありて、巫部ハ物部と同祖なれば、なるべし人ゝ、舊事紀ニ、物部伊莒弗連公、五十琴宿禰之子○圓大使主も、姓を脱せり、雄略紀ニ葛城圓大臣ニ作て、公卿補任ニ、葛城圓使主ニ作とあり、又同書ニ、武内宿禰曽孫、葛城襲津彦孫、玉田宿禰子也とありて、按ニ此ニ、伊莒佛大連と、圓大使主と並、顯宗紀ニ、使主此云於瀰とあれば、大使主ハ大臣ニて、大臣大連の並立てるが如、見ゆれども、然らず、此大連も大使主も、職号ニハあらで、其人を尊て、大を加へたるのみなり、然ニ延喜式歴運記ニ、仲哀天皇始置大連とありて、細字ニ元年詔大伴連持為大連とありて、此紀を見えず、又公卿補任の、此御世ニ、大連葛城圓、使主と記せるハ、此紀をよみ誤りたるなるべし○執國事、職原抄ニ、上古無大臣号、喚執政之人、称食国政申大夫とありて、右ニ見えたる四人を云へるなり

辛未六日○両枝船ハ、水の二

三年冬十一月、丙寅朔辛未、天皇

俣ある を鑿て、をゝしく作たるゝ、記の垂仁段ニ、二俣樞作

泛二兩枝船一、于磐余市磯池、與二皇妃一各分乘而遊宴、膳臣余磯、獻レ酒時、二俣小舟、而持上來而、浮二倭之市師池輕池一と

櫻花落二于御盞一、天皇異之、則召テ物部長眞膳連、詔之曰、是花也非時

ゝるゝ、相似たる傳あり○磐余市磯池、大和志ニ在二十市郡池内村一と記せ

而來、其何處之花歟、汝自可レ求、於

是長眞膳、連、獨尋テ花ヲ獲二于掖上室

ゝ、上ニ磐余池とゝゝるゝ、即是

山一而獻之、天皇歡テ其希有一、即爲二宮、

ゝ、原本磐を盤ニ誤れり○櫻花ハ、復花ゝ、日向国佐土原

名、故謂二磐余稚櫻宮一、其此之緣也、

是日改二長眞膳、連之本姓一、曰二稚櫻

ニ、節分櫻と云ゝて、節分ニ玉

部造、又號二膳臣余磯一、曰二稚櫻部臣一

て滿花、又四季咲の櫻ゝ、うゝる種類ゝ○非時、垂仁紀ニ非時香菓とゝゝて○

掖上室山の、掖上ハ大和国葛上郡ニて、神武紀ニ注せて、室山を和名抄ニ、同郡

卑婁、郷あて○稚櫻部造、姓氏録ニ、若櫻部造、神饒速日命三世、孫、出雲色男命之

後也、四世、孫、物部長真膳連云々とゝゝて差の古傳を記せるゝ○稚櫻部臣、姓氏

録ニ、若櫻部朝臣、孝元天皇皇子、大彦命

孫、伊波我牟都加利、命之後也と有り

戊戌八日○国史ハ文人ニて、

四年秋八月、辛卯朔戊戌、始テ之於二

我古字を以て記しニや○記諸國、置二國史一、記テ言事一、達二四方志一、冬

言事ハ言語と事物とを云、然

十月、堀二石上溝一

を此時、支那字を用ひしと云へゝゝ、當時の事實ニ暗業ゝり、卒其由を云ゝむ、此四

年より百七十年下り、敏達天皇元年、高麗ゝり進りし表疏を、諸史集て三日の間

も、讀むこと能ざるしを、況て此御代ニして、毎国漢學者を置たまひし、理ゝあき

と了解もべし、其こと委国字考ニ記せり○達四方志ハ、風土記のそゝしめニや

○石上溝、大和志ホ、在山邊郡長柄村、今呼布留寺井川とかて

於筑紫所居三神、式ホ、筑前国宗像郡宗像神社三座とかて、是ある○見于宮中ハ、神靈あ現ホ見をなひしを云、式ホ大和国城上郡宗像神社三座とかるを、此時ホ祭りしかたからじ○今慚汝を、其由次ホ見をたて、天書ホ筑紫宗肩ノ神有ニ于臥内、上禱不レ禮○壬寅十八日○河内飼部、継體紀ホ、河内馬飼、首荒籠、欽明紀ホ、河内、馬飼、首押勝、日本靈異記ホ、河内国更荒郡

五年春三月戊午朔、於筑紫所居、宮中言何奪我民矣、吾今慚汝、於是禱而不レ祠

三神見于宮中、言何奪我民矣、吾今慚汝、於是禱而不レ祠

秋九月乙酉朔壬寅、天皇狩于淡路、嶋、是日河内飼部等、従駕執レ繲、先是飼部之黥、皆未レ差、時居レ嶋伊弉諾、神、託レ祝曰、不レ堪血臭、因以

馬甘里、ホど見ゆ○轡和名抄ホ、轡久豆和都良、俗云久都和、新撰字鏡ホ、勒又靷とよめて、和訓栞ホ、口輪連の義と云て○伊弉諾神、式ホ淡路国、津名郡伊佐奈岐、神社○止之ハ、馬飼部を黥ノことを、止めひしなり

ト之兆云、惡飼部等、黥之氣、故自是後頓絶、以不レ黥飼部而止之

○癸卯十九日○劒刀太子王也、按ホ劒刀をとホ續たるも、即血ト溝ホて、樋の義あり、然ともむ古刀ホも、血溝ありてしと察ぬ、次ホ係る枕詞あて、太子王とも、やゞて太子の御世

癸卯、有如レ風之聲、呼於大虛、曰、劒刀太子王也、亦呼之曰、鳥往來羽田之汝妹者、羽狹丹葬立往、汝妹、此ヲ云ニ

狹丹葬立往也、俄而使者忽來曰、

皇妃薨、天皇大驚之、傾命駕而歸

とあるべき意
みや○鳥往來

焉、丙午自淡路至

て、羽と係る枕詞○羽田之汝妹も羽田、矢代宿祢の女を指、汝妹記の上巻に愛
我那邇妹命とありて、汝妹もあり、ニとも男女に渉て親む詞○羽狹丹、大和志
に、羽狹在吉野郡北荘馬佐村、上方、允恭紀に、幡舎能夜摩能ともありて、ヤマムき
此山に葬べき凶兆あり、丹も助辞○狹名來田蒋津之命通證に蓋黒媛之別號
と云て、從ふべし、名義は考ず○使者忽
來て、淡路の行宮にあり○丙午廿二日
申子十一日○

冬十月、甲寅朔甲子、葬皇妃、既而
車持君、姓氏録
に車持公、上毛
野朝臣同祖、豐
城入彦命八世
孫、射狹君之後
也、雄略天皇御
世、供進乘輿、仍
賜姓車持公、按
に皇国に車を

天皇悔之不治神崇而、亡皇妃、更
求其咎、或者曰、車持君行於筑紫
國而、悉校車持部兼取充神者、必
是罪矣天皇則喚車持君、以推問

用ひしに、天書
に天照太神將
以天杵尊爲中
国之主、即賜玄
龍車、追真床之
縁錦衾云々此
玄龍車と云、る
も、いらかる製
あてなむ、訓べ
きもちらざれ
ど、神代より車
のなりしを知
るべし、常陸風
土記に、倭武天
皇云々、車所經之道狹地深淺あどみゆ、三代實録三十二に、讃岐介都宿祢御酉
云々、其先御間城入彦五十瓊殖天皇之後與上毛野大野池田佐味車持、朝臣、同
祖也とあて、是も車持部を知る職の、姓とあるなり、天武十三年紀に、車持
君賜姓曰朝臣○車持部も、車を引く部にて、上代諸国に多うりなむ、地名にも

之事既實焉、因以數之曰、爾雖車
持君、縱撿校天子之百姓、罪一也、
既分寄于神祇車持部、兼奪取之
罪二也、則負惡解除善解除而、出
於長渚崎、令祓禊、既而詔之曰、自
今以後、不得掌筑紫之車持部、乃
悉収以更分之、奉於三神

○日本紀標注巻之十二　○十一

起もり○充神者も、神戸の民ゝ○惡解除、善解除、神代紀ホ注せて○長渚崎、攝津志河邊郡ホ、長洲村長洲濱見也

戊子六日○草香幡梭皇女も、仁德天皇の御女ゝ○辛卯九日○藏職、古語拾遺ホ、當神武天皇之時、帝之與神其際未遠、同殿共牀、以此為常、故神物官物亦未分明、宮內立藏號齋藏、齋部氏永任其職、至於後磐余稚櫻朝、三韓貢獻、奕世無絕、齋藏之傍更建內藏、分收官物、仍令阿知使主與百濟博士王仁、記其出納、始更定藏部、記ホ以阿知直、始任藏官、職員令內藏寮條ホ、頭一人掌金銀珠玉、寶器錦綾絲氈褥、諸蕃貢獻奇瑋之物、年料供進、御服、及別勅用物、事○藏部、職員令內藏寮條ホ、藏部四十人

六年春正月、癸未朔戊子、立草香幡梭皇女、爲皇后、辛卯、始建藏職、因定藏部、

二月癸丑朔、喚鯽魚磯別王之女、神櫛皇子の孫ら、曾孫ホもからむら、神櫛皇大姬郎姬、高鶴郎姬、納於後宮、並子も、景行天皇の御子ゝ○後宮、原本後を后ホ作もり、今一本ホ據る○嬪、後宮職員令ホ、妃二員、右四品以上、夫人三員、嬪右五位以上とゝ、礼曲礼ホ、天子有后有夫人、有世婦有嬪有妻有妾云々、同昏義ホ、古者天子、后立六宮、三夫人、九嬪、二十七世婦、八十一御妻ホ

爲嬪、於是二嬪恒歎之曰、悲哉吾兄王、何處去耶、天皇聞其歎而問之曰、汝何歎息也、對曰妾兄、鷲住王、爲人强力輕捷、由是獨馳越八尋屋而遊行、既經多日不得面言、故歎耳、天皇悅其强力、以喚之不參來、亦重使而召猶不參來、恒居於住吉邑、是以後廢以不求、是讚岐國造、阿波國、脚咋別、凡二族

ど、いたづらに虚數を作りて、並立たるものなり○八尋屋を、神代紀に、八尋殿とあるに、初馳越とへ、文にとゝしく傳へたる、古文の常なり○住吉邑は、攝津の郡名なり○讃岐国造は、景行紀に、神櫛皇子、讃岐国造之始祖也、ゑど併せて、驚住王を神櫛皇子の孫なりとい云へき○脚咋は、阿波国の地名なれべし

之始祖也

丙申十五日○水土不調字の如し、神代紀に不平をよみ、天武紀に、不和をよゑ○年七十、前紀に大鷦鷯天皇三十一年春正月、立為皇太子、時年十五とあるより、數へ、七十七歲なり、又仁德天皇七年、紀に、為大兄去來穗別皇子、定壬生部とある、年より數へ、八十七歲なり、記に陸拾肆歲と記せり○百舌鳥耳原陵、在和泉国大鳥郡、兆域東西五町、南北五町、陵戸五烟、志に在大山陵、南、上石津村と記せり

三月壬午朔丙申、天皇玉體不念、水土不調、崩于稚櫻宮、時年七十冬十月、己酉朔壬子、葬百舌鳥耳原陵

瑞齒別天皇の、御名の義は、齒如一骨とあるに、て著し、是は多遲比、瑞齒別と、稱べきを略たるなり、此天皇を、後に反正と謚奉まり○立為皇太子、の上に、原本立為の二字あるも、衍もとゝ削つ○瑞井、記の安寧、紀に、淡道之御井、宮とあるに

反正天皇

瑞齒別天皇

瑞齒別天皇、去來穗別天皇、同母弟也、去來穗別天皇、二年立爲皇太子、天皇初生于淡路宮、生而齒如一骨、容姿美麗、於是有井、曰瑞井、則汲之洗太子、時多遲花落、有于井中、因爲太子名也、多遲花者、今虎杖花也、故稱謂多遲比瑞齒

を此瑞井のるふるべし、仁德紀ふ、酌淡路島之寒泉、獻大御水とも、ものを、原本瑞、上の、曰を日ふ誤也、もの○多遲花を、遲、下比、字を落せはう、ものざを、為太子、名とかるふ符をず、記ふも頓之水齒別、命ふ、作もの〜ぜ、多遲を多遲比の略ふ紀べし、此頓と諸注、ミハラとよみて、淡路宮を同国、三原、郡ふ在ますと、云、證とせ紀を、民部式ふ、轉頓部姓、注、丹比部と、つるふ心着かさる妄訓ふを、此天皇を河内、国、丹比ふ坐しを、御名ふ負奉てしら、そと此古傳ふよをるる、委を知りがてりを、虎杖を播磨の方言ふ、タンジとも云、を、必古傳ふ從ふべし、多遲花落下有、字を、在の意ふ見はべし○虎杖を、和名抄ふ伊太止里と注し、濕草ふて、本草綱目の集解ふ、田野甚多、三月生苗、莖如竹筆狀、上有赤班點、初生便分枝不禁似小杏葉、七月開花、九月結實云々、是を中国ふて、サジナと云、近江国ふて、ヌタマイ〳〵と云、肥前ふてカハタケと云、を、塩漬ふして食ふふ甚たり、故ふ内膳式雜菜條ふ、虎杖三斗と有を

戊寅二日○己酉六日○大宅

別天皇、六年春三月、去來穗別、天皇崩

元年春正月、丁丑朔戊寅、儲君卽

臣、姓氏録ふ、大春日朝臣同祖、天足彦国押人命之後也、天武十三年、紀ふ、大宅、臣、賜姓、曰朝臣○水事、記ふ九遍之許碁登、臣ふ作もり、九遍も大宅も、同祖ふることと、姓氏録ふ見をたり、同書布留宿禰條ふ、天足彦国押人命、七世、孫米餅搗大使主命之後也、男木事、命云々、續後紀一ふ、大宅水取、臣、繼主云々、繼主、臣、八腹水事、命、後也○皇夫人へ、上の嬪ふ注せを、皇字を加たるを、皇后皇妃の例ふり○香火姫皇女、記ふ甲斐郎女ふ作もり○圓皇女、記ふ都夫良郎女ふ作もり○財皇女を、記ふ財王ふ作もり○高部皇子を、記ふ多訶辨郎女と傳へたり

天皇位ニ、秋八月甲辰朔己酉、立テ大宅臣、祖、木事之女、津野媛ヲ、爲ニ皇夫人ト、生ニ香火姫、皇女、圓皇女ヲ、又納ニ夫人弟媛ヲ、生ニ財皇女ト、與ニ高部皇子

丹比を、河内国の郡名ふて、和名抄ふ太知比と注し、後南北

冬十月、都ニ於河内、丹比、是ヲ謂ニ柴籬宮ト、當テ是時ニ風雨順レ時ニ五穀成リ熟、人

ふ分置して、丹南丹北と云、○柴籬宮ハ、中臣宮處氏本系

民富饒天下太平、是年也太歳丙午

帳ふ、柴垣宮ふ作て、同家牒ふ、多治比能布志加岐能美夜と記せるふ、據りてよみつ、柴をフシと云るも古言あり、名義も質素を以て称せて、河内志ふ、在丹北郡、松原、莊植田村、廣庭神祠、東北

六年春正月戊申朔丙子、天皇崩

○丙子ハ九日、原本甲申朔丙午とあり、集解ふ長暦を推て、改たるふ從ふ○正寢も、大殿ふて、夜、御殿を申せて、天子の御寢坐所ふ、ふと、年中行事哥合をもじめ、源氏桐壺、及中むこしの書ふ見えたて、此御殿ふも、劍璽を安奉ることは、禁秘御抄ふ記し給へども、此ふて崩給ふも、如何と思へど、素より御寢所ふれど、憚てふきふや、正寢とへ支那国ふて、高寢路寢小寢ふど、名づけ、王公らが、居所ふる由を借たる字ふり○御年を洩せて、記ふ陸拾歳とふり

于正寢

原本巻首ふ、日本書紀巻第十三とあり

雄朝津間稚子宿禰天皇

宿禰天皇の、雄を稱、名ふて、記、

雄朝津間、稚子、宿禰、天皇、瑞齒別、ふ男ふ作ます、

天皇、同母弟也、天皇自岐嶷、至於朝津間も、大和国葛上郡の地名ふて、天武紀ふ幸于朝嬬とあるふ、今ある地ふり、

総角、仁惠儉下、及壯篤病容止不傾、六年、春正月、瑞齒別、天皇崩、爰朝妻村ふて、御母の舊居ふ據りたる御名ふり、

群卿議之曰、方今大鷦鷯、天皇之此天皇を後ふ、

子、雄朝津間稚子、宿禰、皇子、與大允恭と謚奉ると○岐嶷も、絵

草香、皇子、然雄朝津間稚子宿禰

允恭天皇

靖紀ホ、イコヨカとよめると、此い幼少の意ホ書りて、文選吳都賦ホ、岐嶷繼體とがるを、張銑が岐嶷少而賢者と注せて、和名抄ホ、禿、無髮也加不路

○総角て、景行紀ホ見えたて

○不便も、景行紀ホ見えたて

○議之日い、御位を繼ぎ給ふべきを

皇子ハ、長之仁孝、卽選ニ吉日ヲ一跪テ上ニ天皇之璽、雄朝津間稚子宿禰、皇子謝曰、我不天久離ニ篤疾一、不レ能ニ歩行一、且我既ニ欲レ除レ病ヲ、獨非ニ奏言一而、密ニ破テ身ヲ治レ病ヲ猶勿レ差、由レ是先皇責テ之曰、汝患病縱ニ破レ身ヲ不孝、孰甚ニ於茲一兵、其長生之、遂ニ不レ得ニ繼業一、亦我兄二天皇、愚レ我ヲ而輕之、群卿共ニ所レ知レル、夫天下ハ者大器也、帝位者鴻業也、且民之父母、斯則聖賢之職、豈下愚之任乎、更選ニ賢王一宜レ立兵、寡人弗ニ敢テ當一、群臣再拜言、夫帝位ハ、不レ可ニ以久曠一、天命ハ不レ可ニ以謙距一、今大王留時ヲ、逆レ衆ニ不レ正ニ號位一、臣等恐、百姓望絶也、願大王雖レ勞、猶卽ニ天皇ノ位一、雄朝津間稚子宿禰、皇子曰、奉ニ宗廟社稷一重事也、寡人篤疾、不レ足ニ以稱一、猶辭而不レ聽、於是群臣皆固請曰、

大王留時、以下十字後漢書光武紀の文なり

忍坂大中姫命を、應神天皇の御孫ゐて、稚淳毛二派皇子の女あり、忍坂を大和国城上郡の郷名ゐて、和名抄ゐ於佐加と注せる、此地ゐ由ゐて名づけしあるべし○所捧鋺水、

臣伏計之、大王奉皇祖宗廟、最宜稱、雖天下、萬民、皆以為宜、願大王聽之

元年冬十有二月、妃忍坂大中姫命、苦群臣之憂吟、而親執洗手水、進于皇子前、仍啓之曰、大王辭而不卽位、位空之既經年月、群臣百寮愁之、不知所為、願大王從群望、強卽帝位、然皇子不欲聽而、背居

云々、鋺ハ神代紀ゐ見ゑたる、初上代ゑ、死ゐ易て起請ときハ、必手ゐ水を捧げし例ゐて、方葉十六ゐ、安積香山影副所見山井之てゐ歌、傳ゐ、葛城王遣于陸奥国之時、国司祇美緩怠、異甚、於時王意不悅、怒色顕面、雖設飲饌不肯宴樂、於是有前采女、風流娘子、左手捧觴右手

不言、於是大中姫命、惶之不知退而侍之、經四五尅、當于此時、季冬之節、風亦烈寒、大中姫所捧鋺水、溢而腕凝、不堪寒、以將死、皇子顧之驚、則扶起謂之曰、嗣位重事、不得輙就、是以於今不從、然今群臣之請事理灼然、何遂謝耶、爰大中姫命、仰歡則謂群卿曰、皇子將聽群臣之請、今當上天皇璽符、於是

持水擊之王膝、而詠其歌爾乃王意解脫、樂飲終日とかゝると、此件の古事と併見て、古義を得べし○璽符、繼體紀ハ、上天子鏡劒璽符、推古紀ハ、奉天皇璽印、孝德紀ハ授璽綬ナドかゝるも、支那国の秦と云ふ代ハ、作初たる璽と云ふ印形ハ、譌たる字ハて、史記孝文紀ハ、上天子璽符、漢書文帝紀ハ、奉天子璽符ナドかゝて、国語璽書の注ハ、璽ハ印也と記し、漢書高祖紀の璽符節の注ハ、符ハ合符以為契者ナド記せて、かゝれ支那字ハ如何書ハむとも、此ハ璽符とかゝるハ、畏くも三種神寶の中なる、御統之曲瓊と申せり、猶是ハい云ふべきもかゝるとど、暫略繼體天皇元年紀ハ、委ノ云ふべし○寡人、孟子ハ寡人之於國也云々、注ハ諸侯自称、言、寡德之人也○己酉十四日○刑部

群臣大喜、即日捧天皇之璽符、再拜上焉、皇子曰、群卿共為天下、請寡人、寡人何敢遂辭乃即帝位、是年也太歲壬子

二年春二月、丙申朔己酉、立忍坂大中姫為皇后、是日為皇后、定刑部、皇后生木梨輕皇子、名形大娘皇女、境黑彦皇子、穴穗天皇、輕大娘皇女、八釣白彦皇子、大泊瀨稚武天皇、但馬橘大娘皇女、酒見皇女

忍坂部の借字ハ、然借りたるも、和名抄郷名ハ、刑部ハ於佐加倍の訓注かゝる如く、上代刑部の古名ありしハや、職員令ハ、刑部一人定刑名、決疑讞とかゝるとど、推捜部の義ハおもべし、三代實録十ハ、刑部と宜号定訟之司とかゝるハ、刑部を此時ハ、如此唱へたるハや、其も何もハ誤れ、爰も皇后の舊居の、忍坂ハ借りたるのみ○木梨輕皇子、名義考えず、地名ハも式ハ、播磨国賀茂郡、木梨神社、輕も大和国高市郡の地名ありり○名形大娘皇女、記ハ長田大郎女ハ作るとり、名形ハ近江攝津等ハ、長田と云ふ地名かゝて、大郎女ハ作るとり、かゝるとど、皇女ハ後ハ加たりと見ゆるとど、姉大娘皇女とよむべし○境黑彦、皇子の、境ハ大和国高市郡の地名、黑彦ハ次ハ白彦と云ふハ、對て共ハ、面色ハかゝるとはかり○穴穗天皇も、安康紀ハ注べし○輕大娘皇女、上ハ云、

て○八釣白彦皇子、記ニハ八瓜之白日子王ト作リ、八釣ハ頭宗紀ニ、八釣宮と
なづて、大和国十市郡八釣村ニ由なる、御名あり○大泊瀬稚武天皇ヲ、雄略紀
ニ注スベシ○但馬橘大娘皇女の、橘ヲ、大和国高市郡ある地名ニて、同郡ニ橘寺
橘村等なり、但馬とヲ垂仁紀の故事ニよりて、橘ニ冠らせたる、枕詞あるべし
○酒見皇女、是ヲ地名ニよりたる御名あり、と聞ゆ
るを、此地名諸国ニ多くもむ、何所とも定がたし
闘雞国造、仁徳紀ニ闘鶏稲置見えたて○汝
者ヲ、汝人ニて、汝と云むとの詞用あらむ
○歴乞ヲ、發語ニも云、もど、此ヲ物を乞ふ意ニ
るべし、万葉ニも、乞をイデと
よ名て○戸母、

初皇后、隨レ母在レ家、獨遊二苑中一、時鬬
雞ノ國ノ造、從二傍徑一行之、乘レ馬而莅レ籬、
謂二皇后一嘲之曰、能作レ園乎汝者也、
○汝、此云マタ那鼻苦且曰、歴乞戸母、其蘭一莖
焉、歴乞戸母、此云二異提一、皇后則採二一根
蘭一、與二於乘レ馬者一、因以問曰、何用求

も、婦人の通称ニあり、和名抄ニ、負俗ニ作刀自云ニ、今按俗人謂ニ那岐ト
老女ニ為ル眉、字從レ目、今訛以レ貝為
自欺と云て、初負をトジとよ
めるも、漢書高帝紀ニ、王媼武
負とある、注ニ
謂老母ニ為ル負云
々、職原抄附録
刀自、條ニ、貫ニ
作るハ誤リ
て、万葉十六ニ、
母爾奉都也、日豆児乃負、同四ニ、念有之、吾児乃刀自ふどなて、刀自と書くるも、
假名ニて、負を誤リて、二字ニ分たるなるべしもいらじ○蘭も、和名抄ニ蘭蒿、阿良々木

蘭耶、乘レ馬者對曰、行レ山ヲ撥レ蟻也、蟻、此ヲ
後皇后、登レ祚之年、覓ニ乘レ馬ニ乞レ蘭者ヲ
而、數ニ昔日之罪ヲ、以欲レ殺、爰ニ乞レ蘭者、
顙搶地叩、頭曰、臣之罪實ニ當レ萬死、
然當ニ其日ニ、不レ知ニ貴者一、於是皇后赦テ
死刑一、貶一其姓一、謂ニ稲置一

○日本紀標注巻之十二　○十九

と注し、本草和名ハ、蘭蕙草とよみ、和訓栞ハ荒々葱ハて、蘭葱と云と注せて、蘭葱といひ蒜ハて、韮の葉ハ似たれど、其本を括て柄をつけ、拂子の如くして、蟣を撥ふしハや、此蘭をフヂバカマともよみて、甚々紛らはしけれど、姑舊讀ハ從ひつ○蟣和名抄ハ、蟣蟻小虫、亂飛也、磑則天風、春則天雨、漢語抄云、加豆乎無之日本紀私記云、末久奈木といひて、是を今糠蚊と云て、行ハ從ひ群をて、目ハ入むとをは、小虫ゐり○首い、大人の義、原本忘を忌ハ誤もり○稻置、成務紀ハ注しつ、国造より一等下もり○良醫、

三年春正月、辛酉朔、遣使求良醫

和名抄ハ、醫治病工也、久須之と注し、即藥師の略ハて、續紀二十ハ、被遣大唐學得醫術、因号藥師、遂以為姓といるを、正字ハて、師を音訓と兼たり、土佐日記ハ、くをしふまをもへて、屠蘇白散酒くをへてもてをたり、源氏寄生ハ、くをしまどのつらハても云々、佛足石の歌ハを、久須理師と見ゑたり

於新羅、秋八月醫至自新羅、則令治天皇病、未經幾時、病已差也、天皇歡之、厚賞醫以歸于國

已丑九日○不賢、仁德紀ハ見ゑたり○氏姓の氏を、源平藤橘の類と云、姓を尸ハて、朝臣宿祢の類を云、又、初支那国ハ、尸てふものハきゆを、當べを字ハく、古より姓字を借てよ、ゑ○或誤失已姓、或故認高氏云々、姓氏錄序ハ、新進本系多違、故實、或錯綜両氏混爲一祖、或不知源流倒錯祖次、或迷失已祖過入他氏、或巧入他氏以為己祖、新古煩亂不易芟夷云々、按ハ上古も中古も氏姓を誤もは

四年秋九月、辛巳朔巳丑、詔曰、上古之治、人民得所、姓名勿錯、今朕踐祚、於茲四年矣、上下相爭、百姓不安、或誤失已姓、或故認高氏、其不至於治者蓋由是也、朕雖不賢、豈非正乎、群臣議定奏之、群臣皆言、陛下舉失正而定氏姓者、臣等冒死奏可

狀も、大方おほど趣あり〻む、然も云、今より、六七百年前までい、未本姓を失ひ
つはも少〻りれむを、今世ふ至りてい、累代神社ふ仕來し家のみ、かつ〳〵其上
祖を、忘まざりつるもはまを見まべ、又別物あり、昭公廿九年、左傳ふ、帝賜之姓曰董、
氏曰豢龍、注ふ豢龍官名とはるを、かゝまを、礼記ふ書氏とい、官名あらむ、唐書
柳冲傳ふ、昔堯賜伯禹姓曰姒氏曰有夏、同服説傳ふ、
始因所生地而爲之姓、あど、其紛らはしさ見るべし

沐浴齋戒も、崇
神紀ふ、ユカハ
アミ、モノイミ
とよめを、式の
大殿祭、詞ふ、持齋麻波利、持浄麻波利、源氏葵
ふ、おむをよ
もり云々、是も

故諸氏姓人等、沐浴齋戒、各爲盟
神探湯、則於味橿丘之、辭禍戸碑、
坐探湯瓮而、引諸人令赴曰、得實
則全、僞者必害盟神探湯、此云區
訶陀智、或埿納釜、
煮沸攘手、探湯、埿、或
掌、
清水、三反延、焼斧火ノ色、置于
たるあり○盟神探湯も、應神紀ふ注せを、繼體紀ふ、樂誓湯云々○味橿丘、式ふ
大和国高市郡、甘樫坐神社、皇極紀ふ起家於甘橿、異齋明紀ふ甘樹丘、東之川上、

戊申詔曰、群卿百寮、及諸國造等
皆各言、或帝皇之裔、或異之天降、
然三才顯分以來、多歷萬歲、是以
一氏蕃息、更爲萬姓、難知其實
ふ、御裔をミア
ナスエと、よを
るふ從ふ○異
之天降も、天降坐し神別ありと、異〻偽るを云○三才顯分以來も、アメツチハ
ジマリテヨリと、よ倣ゝほしく思へど、姑舊讀ふ從ふ、三才も天地人の、三道を
云よし、易繫辭ふ見を○蕃息、雄略紀ふ、募生をよめを、仁賢紀ふ殖をよめを、
蕃息の字い、史記の孔子世家、莊子等ふ見を○萬姓、舊讀ヨロヅノカバ子

造須弥山などは、皆同地ふて、大和志高市郡條ふ、味檀丘、在豊浦村と記せて○辭禍戸碑、記ふ味白檀之、言八十禍津日前ふ作まり、禍戸い言曲所ふて、偽者禍るの意を、時ふ臨て設たる、地名あらべし○或湿納釜煑沸云々、按ふ探湯釜を居、姓氏を正し給ひしい、此時国毎ふ詔こち給ひにむ、故熱湯を探るのみあらず、湿を煮沸て、握らしむる国ひり、或い斧を焼て、掌中ふ置ものしめし国もひりにむを、惣て或云々と、記したるふ、是い天下の人籍を、改作給ふとて、其事次ふ云を見よ○

於是諸人、各著木綿手繦、而赴釜探湯、則得實者自全、不得實者皆傷、是以故詐者、愕然之豫退無進、自是之後、氏姓自定、更無詐人

懸旦、万葉十九ふ、木綿手次肩爾取掛、倭文幣乎手爾取持而ふど、惣て神事ふもは業あり、扨此ふ諸姓の誤もると、正つるも、唯姓のみあらず、天下の人口を數て、戸籍を定給ひしあり、其證を戸令ふ、近江大津宮庚午年籍、不除とひる、義解ふ、雄朝津間稚子宿祢尊御世、諸氏争姓紛亂不定、即盛煮湯令以手探攪詐偽者爛、真誠者全、於是定姓造籍、是為庚午年籍也、とひるを見よ、注者此義解を、讀解ず、淡海朝の年籍を、允恭の御世のふふ誤もりと、云ひいみじきみだて言あり、其も是為庚午年籍、とよまで、允恭天皇四年の制ふ倣ひ、天智天皇九年、庚午年ふ人籍を改造てふるぞよ、戸令の集解ふ、古記云々、信者、得全、以此定姓造籍、とひるも、此御世のふを云て、扨人籍も是より先、崇神天皇十二年紀ふ、更按人民、とあて、爰ふ更とひるもで、彼御代より猶古行されて、其始い知りがし、下りてい欽明元年紀ふ、編貫戸籍云々、孝徳天皇大化元年紀ふも、作戸籍及校田畝、とひて、支那国ふ、戸籍を作りしも、我より遥ふ後も、北史魏文帝太和十年條ふ、定人戸籍、とひれど、只音づものみふて、其後武徳六年ふ至て、そじめて造帳籍、と、事物紀原ふも見をたて、武徳も唐高祖ら世の年号あり、猶我上代戸籍を作りしおとも、戸籍雑徴ふ委記しつ

巳丑十四日○地震の假名い、武烈紀ふ、那為我與鯨據魔、とひれど、ユリと訓べく思へど、

五年秋七月、丙子朔巳丑、地震、先是命葛城襲津彦之孫、玉田宿禰、主瑞齒別天皇之殯、則當地震夕、

増鏡三ニ、此ミとせぞうりは天魚ん為をうふ、おのふり、大鏡五ニ、おのめふる時を、先東宮の西方ニ、まうらせ給ひ○殯宮大夫、是を職員令喪儀司の、正ニ當まり、和名抄ニ大夫、加美○集男女云々、武内宿祢の子孫ニ、うゝる人の出来らむもいかやし、雄略紀ニ、此人を

遣尾張連吾襲、察殯宮之消息、時諸人悉聚、無闕唯玉田宿禰無之也、吾襲奏言、殯宮大夫、玉田宿禰非見殯所、則亦遣吾襲於葛城、令視玉田宿禰、是日玉田宿禰、方集男女而酒宴焉、吾襲擧狀具告玉田宿禰、宿禰則畏有事、以馬一匹授吾襲爲禮幣、乃密遮吾襲而殺于道路、以逃隱武内宿禰之墓域

葛城襲津彦、子と傳へたり○禮幣を、幷ヤジリとよむべし、式の神賀詞ニ、神乃禮自利臣能禮自止云々、類聚国史卅四ニ、礼代乃幣帛ちどりゝ、猶記の下巻ニ、禮物とかるゝおもじ○武内宿祢之墓域を、公卿補任ニ、葬於葛下郡今室墓是也と記し、大和志高市郡荒墳、條ニ、在ニ鳥屋村ニ土俗指ニ最高大者ニ曰ニ武内宿祢墓ニ云々、又八幡本紀ニ、武内宿祢の墓を、大和国高市郡、益田池の未申ニ在りと云、此外是彼書ニ見ゆれど、何れも真ならむ

襖、字書袍の注ニ、襖也とあり、和名抄をもじめ、諸字書ニ、アヲと注せるも、字音の轉じたるなり、衣服令武官礼服、位襖の義解ニ、謂無襴之衣也とあり、襴とハ裾なり、襲束要領抄

天皇聞之、喚ニ玉田宿禰、宿禰疑之、甲服襖中而參赴、甲端自衣中出之、天皇分明欲知其狀、乃令小墾田采女賜酒于玉田宿禰、爰采女分明瞻衣中有鎧而、具奏于天皇、天皇設兵將殺、玉田宿禰、乃密逃

ホ、襖ヲ冬ハ裏なる狩衣と記せり、後の制なるべし○小墾田ヲ、准古天皇の宮所ホて、大和国高市郡あり○甲申十一日○耳原陵、諸陵式ホ、在ニ和泉国大鳥郡一、兆域東西三町、南北二町、陵戸五烟、志ホ在ニ大山陵一北、属ニ中筋村一、今稱ニ旃井原陵一、此ホ先帝の葬日を記せハハ、五年ヲ六年ヲ定ヲあらす、其ヲ何ヲホまれ、改葬の時を記せるホや

出テ而匿レ家ニ、天皇ヲ發レ卒ヲ園ニ玉田家ヲ、而捕テ之乃誅、冬十有一月、甲戌朔甲申、葬ニ瑞歯別ノ天皇ヲ、于耳原ノ陵ニ

七年冬十二月、壬戌朔、讌ニ于新室ニ、上代ハ新室祝として、讌會せしを常ありき○

天皇親之撫琴、皇后起テ儛、儛既ニ終テ而不レ言ニ禮事ヲ、當時ノ風俗、於ニ宴會ニ儛者、儛終テ則自對ニ座長ニ曰、奉ニ娘子ヲ也、

禮事、字鏡集色葉字類抄等ホ、禮をウヤとよみ、景行紀ホ、出入無禮、類聚名義抄ホ、禮ハ代ホど見ヱ、然ヱむ禮と云ヲヱ、本語ホて、ウヤビとヱ、ウヤマヒとヱ、活し云ヘヱ、舊讀ウケコトとなるヱ、誤リホて、次ホヱ禮事とよ爲ヱ、同義ホヱ○姓字ハ、氏と名あり、字をナとよめるハ、顯宗紀ホ改レ字、敏達紀ホ字隨羽黒とかヱ、支那人ハ名と字を、一人二名ホ作ヱ、字をさアザナと云、るヱ、混らそしまず業あり○衣通郎姫、紀伊国若浦ホ祭ヱる、玉津嶋神社ハ、此郎姫を祭ヱりと云ヘヱ、記ホヱ此姫を、輕大郎女の一名ホ傳ヘたヱ

時天皇謂ニ皇后ニ曰、何失ヒルニ常ノ禮ヲ也、皇后惶之復起テ儛、儛竟テ言ニ奉ニ娘子ヲ、天皇卽問ニ皇后ニ曰、所奉娘子ハ者誰レゾ也、欲レ知ニ姓字ヲ、皇后不レ獲レ已ムヲ而奏シ言、妾ヲ弟名オトヒメナリト申ハ、弟姫ハ容姿絶妙無レ比、其艶色ウルハシキイロ徹レ衣而晃之、是以時ノ人、號曰ニ衣通郎姫ノ也

令進、原本令字と落せり、類聚国史ふ據る○坂田は、近江国の郡名○中臣烏賊津使主へ、仲哀紀、神功紀等ふ見えたり、祖先の名を襲たるみや、う〜る例なり。

天皇之志、存于衣通郎姫、故強皇后而令進、皇后知之、不輙言禮事、爰天皇歡喜、則明日遣使者、喚弟姫、時弟姫隨母、以在於近江坂田、弟姫畏皇后之情而不參向、又重七喚、猶固辭以不至、於是天皇不悅而復勅一舍人、中臣烏賊津使主、曰皇后所進、之娘子弟姫、喚而不來、汝自往之召將弟姫、以來必敦賞矣、爰烏賊津使主、羨命退之、

糒、和名抄ふ、乾飯也、保之以比とかゝ、後世略キてホシヒと云、即伊勢物語ふ見えたるカレヒと同物ふ○裹は、字書ふ衣、身也と注せり

糒裹裍中、到坂田、伏于弟姫庭中、言天皇命以召之、弟姫對曰、豈非懼天皇之命、唯不欲傷皇后之志耳、妾雖身亡、不參赴、時烏賊津使主對言、臣既被天皇命、必召率來矣、若不將來、必罪之、故返被極刑、寧伏庭而死耳、仍經七日、伏於庭中、與飯食而不喰、密食懷中之糒、

於是弟姫以爲、妾因皇后之嫉、既拒天皇命、且亡君之忠臣、是亦妾罪、則從烏賊津使主而來之、到倭春日食于櫟井上、弟姫親賜酒于使主慰其意、使主卽日至京留弟姫於倭直吾子籠之家、復命天皇、天皇大歡之、美烏賊津使主而敦寵焉、然皇后之色不平、是以勿近宮中、則別搆殿屋於藤原而居也、

櫟井上、大和志ハ、添上郡櫟本村ヿて、記ス春日臣壹比韋臣ヿて、同地名ヿて

藤原ハ、大和国高市郡ヿて、特統天皇皇居の地、志ハ在ニ大原村ト記せて

結髮、上代ハ男もはすべハ、髮を垂ト、人の妻とありて、結揚しふと、古書ハ散見ス伊勢物語ハ、くらべ來し、ふて わけ髮も肩過ぎぬ、君ならずして、誰り上べき○和鐵勢故鐵も、我夫子之ハて、夫子とも、天皇を指奉

適產大泊瀨天皇之夕、天皇始幸藤原宮、皇后聞之恨曰、妾初自結髮陪於後宮既經多年、甚哉天皇也、今妾產之死生相半、何故當今夕、必幸藤原、乃自出之燒產殿而將死、天皇聞之大驚曰、朕過也、因慰喻皇后之意焉

八年春二月、幸于藤原、密察衣通姫之消息、是夕衣通郎姫、戀天皇

もり○勾倍枳豫臂奈利ハ、可来夜也あり○佐瑳餓泥能ハ、小蟹之ゐて、蜘の別名あれど、やゞて枕詞ゐたり○區茂能於虚奈比も、蜘之行ゐて、行といふ挙動を云、扨此語原ハ動ゐ、ナヒの加へたるゐて、音ナヒトナヒの例あり、重之集ゐ、足高蜘の手ゐとつ、おちたるゞ、二三日おごくをと云、詞ゐて、ちゝゞゐの、くもれもくての動くゞゐ、風をいのちゐ思ふゐゐべし、とうるゐて、動より出たる語ありと、知るべし○虚豫比辞流辞毛も、今宵著しゐて、毛ハ助辞あり、古今ゐハ、蜘のふはまひ、かぬてゐるゝもと、改て載たり、今世ゐも、ちゞり蜘を見もむ、稀ゐる人の来むと云へるも、久しき諺ゐるぞりし○佐瑳羅餓多、諸説ありもど、紀ゐ言小形文也と、

而獨居、其不知天皇之臨、而歌曰、

和餓勢故餓、勾倍枳豫臂奈利、佐瑳餓泥能、區茂能於虚奈比、虚豫比辞流辞毛

天皇聆是歌、則有感情而歌之曰、

佐瑳羅餓多、邇之枳能臂毛弘、等

なるぞ穏ゐる錦紋の細ゐある枳舎氣帝、阿麻哆絆泥受邇、多儴を小形といふ云、

比等用能未

○邇之枳能臂毛弘ハ、錦紐をあり錦も既履中紀ゐも見匹て和訓栞ゐ丹白黄ありと云、今按ゐ丹白絹ゐ○等枳舎氣帝も解放而ゐり○阿麻哆絆泥受邇ハ數多者不寝ゐて邇といふ俗ゐヨゐ通へり古今ゐ通へ古今ゐそれをだゐ、思ふゐとゝて我宿をみるとゐいひそ、人のをらくゐ」と云ふゐ、ゐおゐじ其を人の聞よと云を延たるゐて猶例多うり原本邇を迹ゐ作るゝど迹を紀中假名ゐ用たる例ゐし今類聚国史ゐ様て改む○多儴比等用能末ハ唯一夜而已ゐて、歌意ハ顯きたり

波那具波辞も花細ゐて細と明旦天皇、見井傍櫻、莵而歌之曰、

も闕る事ゐく行足らひたる意ゐり名細香細准、知るべし

波那具波辞、佐區羅能梅涅、許等

○佐區羅能梅涅ハ、愛ゐて

梅涅麼、波挪區波梅涅孺、和我梅

豆留古羅、皇后聞之、且大恨也

能ふ如キの意を含め、郎姫の美麗(クルハシキ)も、花ふも勝もりとあり○許等梅涅麿も、言愛者ふて、唯口先以て、愛(ウツクシ)とあらむの意あり下ふ去(コト)等(ラ)も、去等も専おあじ○波揶區波梅涅孺も、速者不愛(ウツクシ)して、心ふくロ先のしの、愛(ウツクシ)あらむふい、始(ハジメ)よりかむくり、心を盡してい、愛(ウツクシ)まじきをとなり上ふ重(ナヲ)七喚とゐるを思ふべし○和我梅豆留古羅も、我愛(ウツクシ)子等(コラ)あり

威儀字の如し、

万葉ふ容儀光

於是衣通郎姫、奏言、妾常近王宮、儀等を、スガタとよめるい非而晝夜相續、欲視陛下之威儀、然あり、何ともこの威儀ふあらひて、ヨソヒとよむべし○茅渟皇后則妾之姉也、因妾以恒恨陛下、亦爲妾苦、是以冀離王宮、而欲和泉国の郡名ふて、遠居若皇后嫉意少息歟、天皇則名ふて、是を河内茅渟と云、るも、垂仁紀ふ注更興造宮室於河内茅渟而、衣通

せて、原ふ渟を淳ふ誤もり、和泉名所図會日根郡條ふ、衣通姫舊跡も、中筋村ふ、土人衣通姫の手習所といふ、五十年前小社ありて、社の傍ふ池ありて、方一町許云々、近來壞(クヅレ)て糞田とし、小社も亦泯滅と云、て○日根も、

郎姫令居、因此以屢、遊獵于日根野

和泉国の郡名ふて、野も其所ふ、ありて

茅渟宮、續紀七ふ、割河内国和泉日根両郡、令供珍努宮、同十五ふ、太上天皇幸智努離宮、志ふ在日根郡上郷中村○百姓之苦云々、元年紀ふ、捧銃の苦言、妾如毫毛、非嫉弟姫、然恐陛下、屢幸於茅渟、是百姓之苦、仰願宜

九年春二月、幸茅渟宮、秋八月幸茅渟宮、冬十月幸茅渟

十年春正月、幸茅渟、於是皇后奏言、妾如毫毛、非嫉弟姫、然恐陛下、屢幸於茅渟、是百姓之苦、仰願宜

諫を、打合せ思ふ、此皇后も絶世の賢后ふ
て座はらし○丙午四日○等虚辞陪邇も、長
ふてトコシナへとも云、て、万葉十八ふ、等已之部爾、可久之母安良米也○枳彌母阿閑椰毛も、君も逢やふて、毛も助辞此椰もヨふ通ひ、希求の意ふて○異舎儺等利も、海の枕詞ふて、万葉ふ鯨魚取と書き、鯨を捕る海とつゞけたて鯨をイサとよめる例も、神武紀の伊珠區波辞の、歌ふ注しつ○宇彌能波

除車駕之數也、是後希有之幸焉、
十一年春三月、癸卯朔丙午、幸於
茅渟宮、衣通郎姫歌之曰、等虚辭
陪邇、枳彌母阿閑椰毛、異舎儺等
利、宇彌能波摩毛能、余留等枳等
枳弘、時天皇謂衣通郎姫曰、是歌
不可聆他人、皇后聞必大恨、故時
人號濱藻、謂奈能利曾毛也

摩毛能も、海之濱藻のふて、海邊ふ生る、一種の海菜を云、猶次ふ云、を見よ○余留等枳等枳弘も、寄時々ふて、弘も歎息の辞ふり、扨寄るとい藻の波ふ隨ひて、磯ふ流るとよる如く、時々茅渟ふ寄來坐して、逢ぬへとふり○奈能利曾毛ハ、莫告藻ふて、他人ふ聞ゝしむるを、誡めぬへる、故事より負たり、和名抄ふ、本朝式云、莫鳴菜、奈々里曽、漢語抄、神馬藻、三字云奈乃里曽、今案本文未詳、但神馬、莫騎之義也、万葉四ふ、家乃島、荒磯之字倍爾、打靡、四時二生有莫告我とゐれど、濱近を處ふゐる藻ゐりと聞ゆ、民部式伊勢国、雑物交易、中ふ、那乃利曽五十斤とゐて、大和本草ふ、ナノリソノ老タルヲ、ホダハラト云、正月春盤ノ上ニヲクモノ也、海中ニ生ス、短キ馬ノ尾ノ如ク、細葉如絲、節々連ル、枝多シ、生ナル時黒シ、湯ニ入レバ青クナル、魚ノ脛ノ如クナルモノ、多ク枝ニツケリ、見事ナル藻ナリ、ワカキ時ユビキ、或煮テ食ス、脆ク味ヨシ、と云へて、下學集塵添埃嚢抄奥儀抄等ノ説も用ゐたし

先是衣通郎姫、居于藤原宮、時天
皇詔大伴室屋連曰、朕頃得美麗
子、是皇后母弟也、朕心異愛之、

大伴室屋連、姓氏録ふ、高志連、天押日命十一世孫、大伴室屋、大連とゐて、猶此人も雄略紀、

武烈紀等ホ往々見ゆ○藤原部ハ、諸国ホ其部曲を置キ、然ル地名絶て明ラむ、姓ホも、

冀ハ其名欲レ傳ニ于後ノ葉ニ、奈何、室屋ノ連依レ勅而奏ニ可ル、則科ニ諸國造等ニ、爲ニ衣通ノ郎姫ノ、定ニ藤原部ヲ

天武十二年、紀ホ、藤原部造賜レ姓曰レ連、續紀廿ホ、改ニ藤原部姓ニ、為ニ久須波良部とゝりもど、氏人も續紀廿六ホ、久須原部浄日と云ふ人見えて史ホハ是のみ

甲子十二日○麋和名抄ホ麋似レ鹿而大ニ毛不班、漢語抄云、於保之加、新撰字鏡ホ、麞をよめる○莫々紛々も、在之乱ホて、群りたる狀を云ふ、漢書揚雄傳ホ、

十四年秋九月、癸丑朔甲子、天皇獵ニ于淡路ノ嶋ニ、時麋鹿猨猪、莫莫紛紛、盈ニ于山谷ニ、焱起蠅散然、終日以不レ獲ニ一獸ノ、於是獵止テ、以更ニ卜矣、嶋ノ神崇テ之曰、不レ得レ獸者是我之心也、

莫莫紛紛、山為之風、焱、注ホ莫々、塵埃貌、紛々、亂起貌、呂氏春秋ホ、紛紛分分、其情難レ得、注ホ殺亂也とゝりて○焱起、字書ホ焱、火華也と注せて、火ノ秀の然立ツ如く、群聚とあり○終日以不獲ニ一獸ノ、注者孟子ホ、終日而不レ獲ニ一禽、とゝりるを引出て、此紀を撰ぶ人、應呼の如云ふとど、孟子ハ今より三四百年前なれども、世ホ聞えざるし書あり、然も彼書も、不経ホ渉ふはあるを、天神地祇惡ミ坐て、皇国ホ入ぬもず、若強て持渡る人ありれば、其船を必覆没すと、五雜俎ホ、記せるを見はべし○真珠、和名抄ホ、日本紀私記云、之良太麻とゝりて、秘庫器録ホ、秘府略を引て、孝靈天皇二十年二月、伊豆国献白色寶玉二千、同二十三年三月、相模国献白色寶玉五千三百、同三十二年十二月、信濃国献白色寶玉八百五十云々、以上白玉の例あり○白水郎、和名抄ホ、辨色立成云、白水郎、和名阿萬、今按日本紀云、用漁

赤石ノ海ノ底ニ、有ニ眞珠ヲ、其珠ヲ祠ニ於我ニ、則悉當レ得レ獸ヲ

爰ニ更ニ集ニ處ヲ處ノ之白水郎ヲ、以令レ探ニ赤石ノ海ノ底ニ、海深不レ能レ至レ底、唯有ニ一海人ノ、曰ニ男狹磯ト、是阿波ノ國長邑ノ之海

人二字、一云用海人二字と乃て、海人ハ上ホ見ゑたり、此白水を通證ホ、西土の地名として、其地人よく、水ホ沈むよしと記せて、輟耕録ホ、廣東采珠之人、懸繩于腰、沈入海中、良久得珠、攄其繩船上人挐出之云々、有司名曰烏蜑戸とゝり、此烏蜑戸を、アマコとよむもの

人也、勝於諸ノ海人、好探深、是腰繫繩、入海底、差須臾之出曰、於海底有大蝮、其處光也、諸人皆曰、嶋ノ神、所請之珠、殆有是蝮ノ腹乎、亦入探之、爰男狹磯、抱大蝮而泛出之、乃息絶以死、浪ノ上、既而下繩測海底、六十尋、則割蝮實眞珠有腹中、其大如桃子、乃祠嶋ノ神而獵之、多獲獸也、唯悲男狹磯入海死之、則作

ゝて おがつゝ ゐし ○長邑ハ、墓厚葬、其墓猶今存之

阿波国の郡名那賀ゐゝ、国造本紀ホ、長国造見ゑ、彼国ホ長直の人も、續紀卅二、三代實録二十等ホ見ゑたり、類聚国史卅二、天皇遊獵部ホ據て補ふ○須臾、原本須を頃ホ作て、臾を落せて、今類聚国史ホよて訂ス○蝮と鰒ホ、かよそし書ゝ○割蝮實眞珠云々、武烈紀ホ、婀我哀屢拖摩能、婀波寢之羅陁魔○其墓云々、阿波国人宮崎五十羽云、同国板野郡里浦村、鰯山麓ホ古墳乃て、里人冢塚と云て、是海人男狹磯の墓也と、土人傳云、てとぞ

庚子七日○同母妹のうとも、二十三年春三月、甲午朔庚子、立次ホ云○悒ハ、木梨輕皇子、爲太子、容姿佳麗、見字書ホ不安也憂也、と注せて者自感、同母妹、輕大娘皇女、亦艶○阿資臂紀能ホ次ホ係る枕詞ゐゝ、通證ホ妙也、太子恒念合大娘皇女、畏有山足如曳裾也と云、記傳ホ冢罪而默、之然感情既盛、殆將至死、

引城として、足も山足引ゝい長く引延たる狀、城も一構への地を云ゝと云、又、是をアシビキと濁音ゝ、よみたる例ゝく、記ゝも阿志比紀ゝ作又、万葉ゝ、足日木、惡氷木、足氷木、足引、足曳、足檜木、足疾、葦引、蘆檜木ゝど、書ゝるゞ、百八首見えたる中ゝ、三十七首も、安之比奇、又安志比紀と、假名ゝ書きて、濁音ゝるも一つもゝし、心えゝくべきゝり○挪摩娜箇彌、斯哆媚烏和之勢、志又○挪摩娜箇彌も、山高ミゝり○斯哆媚烏和之勢も、下樋を令走ゝて、土中ゝ樋を臥せ、水を通もす如く、相思ふ中を人ゝれず、通もをとゝり○志哆那企貳

爰以爲、徒非死者、雖有罪何得忍乎、遂竊通、乃悒懷少息、因以歌之曰、阿資臂紀能、椰摩娜烏菟約利、椰摩娜箇彌、斯哆媚烏和之勢、志哆那企貳、和餓儺勾菟摩、箇哆儺企貳、和餓儺勾菟摩、去鑮去曾、椰主區津娜布例

え密泣ゝて、忍びゝ泣ゝを云、惣て志哆てゝ語も、古書ゝ見えたる皆ゝ、ゝし○和餓儺勾菟摩も、我泣妻ゝて、我とゝい妻ゝ係もり○箇哆儺企貳も、偏泣ゝて、仁德紀ゝ見えたる○和餓儺勾菟摩も、上ゝゝゝど○去鑮去曾の去鑮も、密ゝて、俗ゝコツソリと、入声ゝ云、又、此語物語書ゝ多く、下の去曾も辭の社ゝり○椰主區津娜布例も、易傳ゝゝるべし、扨津を假名ゝ用ひ、娜を清音ゝ用ひたる例、此の外ゝ見えざるも、誤字ゝやと思へど、未だ思ひ定めゝぬ、後人よく考べし○一首の意も、高き山田を作るゝ、下樋より水を引て、走り通すし如く、人ゝ知らるゝ、閒使を通もしむれど、逢ひがゝしと、泣つる妻も、思ふ言の容易く、傳ふることゝよと、ゝり○御膳を御贄ゝて、贄も新饗の略ゝり、其も新しき物以て、饗奉る意ゝるとも、御膳の字をよめ又、支那国ゝても、尊て御字を書ゝり、晉書五

二十四年夏六月、御膳羮汁凝以作氷、天皇異之、其所由、卜者曰、有内亂、蓋親親相姦乎、時有人曰、木梨輕太子、姦同母妹輕大娘皇女、因以推問焉、辭既實也、太子是

行志ハ、蒋ニ大官、御膳、北史毛脩之傳ハ、進ニ御膳ニ、あどけり○羹

爲儲君不レ得レ罪、則流ニ輕、大娘、皇女

於伊豫ニ

汁、和名抄ハ、有レ菜曰レ羹、無レ菜曰レ臛、和名阿豆毛乃と訓テ、即熱物ハて、熱くして食ふを云て物とも吸物、焼物、漬物、浸物、引物、撮物あど、惣て食事ハ云テ○親々相新、按ハ同母妹ハ通ぜしい、是より前ハい見ゑず、下て宇多天皇の皇子、敦慶親王、同母妹均子内親王を娶り給ひしこと、見ゑこそど、甚稀なる例ハて、漸く禁の緩みたるなり、扨上代姑、庶母、異母妹ハ通ぜしい、更ハ憚ることなりしを、支那物識ら、彼国の經書とり、云つめる書ハ記せる、教誨語ハのみ、目ハれ、真の事實を搜らぎして、我古典ハ向ひ、風俗之陋ハあど云ういいうハぞや、支那国ハい上代より、上蒸下淫其分ハあきゆゑ、是を禁じて、不レ取ニ同姓ニとさ、云もど、行れざると、其確證とも數十條を引出て、西籍新論ハ記しハきつ○流於伊豫、記ハい太子を、伊豫ハ流と傳たり、流罪い中昔より、遠流中流近流を定給へり、其由續紀九ハ見ゑたり

○於褒企彌烏

是時太子歌之曰、於褒企彌烏、志も、大君をハて、大君とい天皇

摩珥波夫利、布儺阿摩利、異餓幣

とゝじめ奉り、皇族男女ハ渉り利去牟鋤、和餓哆哆瀰由璹、去等

たる称なり、爰ハ輕、皇女を指、烏許曾、哆哆瀰等異絆梅、和餓菟

○志摩珥波夫利も、嶋ハ放りハ摩烏由梅

て、嶋とも伊豫を云、記ハ波夫良婆ハ作り○布儺阿摩利も、船狂ハて、物くるほしく荒ぶる狀を、中昔の書ハアバリと云、もも、本語もアマリなり、其も乘狂ひて歸來と云、意○異餓幣利去牟鋤の異も發語ハて、將歸來なり、此鋤ハ歸來給ものゝと云、意顯もなり、扨發語を濁音ハて、受たる例い、万葉五ハ、伊賀可流久毛能とある、伊い發語ハて、懸る雲と云ハおなじ○和餓哆哆瀰由璹も、我疊勤ハて、共ハ寢給ひし疊、上ハ、歸來べしとなり、由璹とい万葉ハ、勤又謹をよみ、必ず違ふなくと、押決たる詞なり○去等烏許曾、哆哆瀰等異絆梅い、訳を社疊と將言ハて、是も訳ハとそと云べおを、然云るい古言の一格なり、原本下の哆を多ハ作もり、今釈紀ハよりて改む○和餓菟摩烏由梅も、我妻を必ハて、由梅の意上ハおなじ、一首の意も、皇女を嶋ハ放らば、船ハ乘狂ひ歸來給ふべきものゝ、共ハ寢し疊を必忘るなりも、詞上ハ疊ハどと云、ゞ社、物遠く開ゆめも、我妻よ必我を忘るなとなり

阿摩儴霧も、天飛の轉ふて、輕を雅として、續けたる枕詞ふて○箇留悦等賣ハ、輕少女○異哆儺介麼ハ、痛泣者なり○臂等資利奴陪瀰も、人可知ふて、可を陪べと云へ、決せざるふ云て○幡舍能夜摩能ハ、羽狭山之ふて、大和国吉野郡の地名あること、履仲紀ふ云つ○波刀能資哆儺企邇奈勾も、鳩之密泣ふ泣ふて、能ふ如の意を含て見るべし、奈勾も泣とならべく思へど記ふも那久とな

又歌之曰、阿摩儴霧、箇留悦等賣、異哆儺介麼、臂等資利奴陪瀰、幡舍能夜摩能、波刀能、資哆儺企邇奈勾

戊子十四日○四十二年春正月、乙亥朔戊子、天年若干ハ、大方ふ數おかをを云、賴基集ふ、そとむくの、年つみくれど、春日皇崩、時年若干、於是新羅王、聞天皇既崩、驚愁之、貢上調船八十艘、

野ふ、おふは若菜も、老せざりなり、記ふ御年漆拾捌歳とらもど、天皇の御母磐之姫も、仁徳天皇、三十五年ふ薨ぬへて、其年より數へても、百七年を經たり○樂人上古皇国の喪葬ふ、舞樂を奏せしも、靈を慰むるためふて、奏古葬徴ふ記しおおつ、後漢書八十五、皇国の事を記せは條ふ、停喪十餘日、家人哭泣不進酒食、而等類就歌舞爲樂、又魏志三十ふも、死有棺無槨、封土作冢云々、不食肉喪主哭泣、他人就歌舞

及種種、樂人八十、是泊對馬而大哭、到筑紫亦大哭、泊于難波津、則皆素服之悉捧御調、且張種種、樂器、自難波至于京、或哭泣、或歌儺、遂參會於殯宮也

己卯十日○冬十月以下、十八字、原本ふ、及船數下ふ書續た

冬十月、庚午朔己卯、葬天皇於河内長野原陵、十一月、新羅吊使等、

ると、錯簡あり、今集解ハ華たるハ従ふ○長野原陵も、諸陵式ハ、恵我長野北陵、在河内国志紀郡、兆域東西三町、南北二町、陵戸一烟、守戸四烟、志ハ在志紀郡澤田村、恒愛、拾遺集ハ、さくら花底ハ散影ぞ、とし侘る、ふづめる人の、もはと思へむ、夫木集十四ハ、初もふの梅をだハこそ、をしみしら、思へむ今も、むとつ此花、此をしむと、惜の意ハ云へるも後と○耳成山も、大和

喪禮既闋而還之

爰新羅人、恒愛京城傍耳成山、畝傍山則到琴引坂顧之曰、宇泥咩巴揶、彌彌巴揶、是未習風俗之言語、故訛畝傍山謂宇泥咩、訛耳成山謂瀰瀰、時倭飼部、従新羅人聞是辭而疑之以為、新羅人通采女耳、乃返之啓于大泊瀬皇子、皇子

国十市郡ハ在て、真ハ美しを山あり○畝傍山も、高市郡ハ在○琴引坂も、葛上郡ハ乃て○巴揶も、歎息の辞○訛耳成山謂瀰瀰、下原本耳字なし、傍注の加、マたるハめもを、削そつ○采女耳の耳い、此采女の名ありけむ、故宇泥咩瀰瀰と云、と、聞僻なり、通證ハ此耳を耳とよ久、集解ハい衍字と見て削り○虚言、繼體紀ハ必是虚也とあり、偽りハあるし

則悉禁固新羅、使者而、推問、時新羅、使者啓之曰、無犯采女、唯愛京傍之両山、而言耳、則知虚言、皆原、於是新羅人大恨、更減貢上之物、色及船數

安康天皇

穴穂天皇は、大和国山邊郡の地名なりたる、御名なるべし、此天皇を、後に安康と諡奉れり○第三子、此傳の方正し○稚淳毛二岐皇子も、應神天皇の御子○瘞禮、字書に瘞、埋也と注し、爾雅に祭地曰瘞薶、礼祭法に、瘞埋於泰折、祭地也○太子も木梨輕太子なり○

穴穂天皇

穴穂天皇、雄朝津間、稚子宿禰の天皇、第二子也、一云第三子也、母曰忍坂大中姫命、稚淳毛二岐皇子之女也、

四十二年、春正月天皇崩、冬十月瘞禮畢之、是時、太子、行暴虐、淫于婦女、國人謗之、群臣不從、悉隷穴穂皇子、爰太子欲襲穴穂皇子而、密設兵、穴穂皇子復興兵將戰、故

穴穂括箭、和名抄に、箭受弦處也、夜波須と云て、括も筈に出るなり、記に此王子所作之矢者、即今時之矢者也、是謂穴穂箭と云とも、普通の箭なれを、輕箭に對て然云て○輕括箭、記に爾時所作矢者、銅其箭之内故号其矢謂輕箭也とは、こゝとも記の趣なれ、鏃を銅にして、作たりしと察ゆるを、爰に括箭とは、此紀に銅以て、筈を作りしにや

穴穂括箭、始起于此時也

大前宿禰も、履中紀に見えたて○於朋摩弊鳥摩弊輸區涅餓、大前小前宿禰之祖、大前と小前と、兄弟二人の名なり、舊事紀に、物部大前宿禰、氷連等祖、小前宿禰、田部連祖、並

時太子知群臣不從、百姓乖違、乃出之匿物部大前宿禰之家、穴穂皇子聞則圍之、大前宿禰出門而迎之、穴穂皇子歌之曰、於朋摩弊、烏摩弊輸區涅餓、訶那杜加礙、訶區多智豫羅泥、阿梅多知夜梅牟

麥入宿祢子とゐて、原本漆を塗ふ誤れり、釈紀ふ據りて改む○訶那杜加礙い、金門蔭ふて、金門も金以て鑛たるを云ふ、原本杜を社ふ誤れり、今釈紀ふ據る○訶區多智豫羅泥い、如此立寄の延たるあり、泥を釈紀ふ涅ふ作れり○阿梅多知夜梅牟も、雨將二立止一ふて、記ふ到二其門一時零大氷雨一とゐれども、暫門蔭ふ立寄れ、其間ふ雨も止むと、御身方の兵士ふ告げふあり、夜梅牟の梅も、マの古音以て書れり、若字の儘ふ、ヤメムとよみても、雨を止しむるふて、止雨の祈あらでい、然云ふまじきをや、紀ふも夜末牟とゐる。

涕挪比等能い、官人之ふて、官女を云ふ、後宮職員令ふ、妃夫人嬪宮人とゐりて、義解ふ、婦人仕官者之惣號也と記し、天智紀ふ、有二宮人一生男女者四人、ふ

大前宿禰、答歌之曰、瀰挪比等能、阿由臂能古輸孺、於智珥岐等、瀰挪比等等豫牟、佐杜弭等茂由梅、乃啓二皇子一曰、願、勿害太子、臣將議由是太子、自死于大前宿禰之家

どゐり、然を宮人とい縉紳家の惣名ゐりと云、或ハ神社ふ仕ふる人を云ふと云へるい、無替ふ學びふ暗き業ゐり○阿由臂能古輸孺い、脚結之小鈴ふて、脚結とも行縢の如く、足ふ服もるものゐり、雄略紀天武紀等ふ、脚帶をもよめも、小鈴も飾りふ著しゐり○於智珥岐等も、落ふきとての意ふて、太子の勢盡て、大前の家ふ落來ふ喩ふ○涕挪比等等豫牟も、宮人動搖ゐり○佐杜弭等茂由梅も、里人も謹ふて、謹といい制止の詞ゐり、是も太子ふ從來ふ、官女も里人も、騷を周章ゐりとの意、扨大前宿祢も、太子の危難を顧ミず、皇子ふ阿ることと、其趣記ふ見ゑたり、原本杜弭を、社弭ふ誤れり、今釈紀ふよりて改む○一云も記の傳ゐり、因二云一河内国古市郡輕墓村ふ、池を堀めぐらしたる、大きふる墓ゐり、土人も輕墓と称し、輕太子の御墓と傳云ふり、年治按ふ、太子も罪人ゐりもむかゝる高大の墓を、築べき理ゐりもむ、是い假墓ふて、空陵ふらむと見過しを、近年好事のもの、空墓の轉ふて、日本武尊の御墓ゐらむと云、ま、一説ふ備へ、おくべし○壬午

十二月己巳朔壬午、穴穂皇子、卽二皇位一、尊二皇后一曰二皇太后一、則遷二都一

十四日○石上も、大和国山邊

天皇位、尊二皇后一曰二皇太后一、則遷二都一

郡の郷名○穴穂宮、大和志ニ、在山邊郡田村ニ、と記せり、按ニ素より、此地ニ女名不坐しゆゑ、御名ニ見諸記ニ、ふも、負ひしを、ふまち其所を、帝都と定めふを、遷都と記せるハ、此紀の文法ニて、其ととレ既ニ云、ヲ○女名云々、六字若も後人の攙入ち、反正天皇ニハ、三皇女坐ヲ、爰ニ女等とうもとバ、三人ニ係りたる称ニて、名を洩せるハ論とあし

于石上ニ、是謂ニ穴穂ノ宮ト、當ニ是時ニ、大泊瀬ノ皇子、欲レ聘ニ瑞齒別ノ天皇之女等ニ、皇女等對テ曰、君王恒ニ暴ニ強也、儵ニ忽ニ忿起ニ則朝ニ見者ハ、夕ニ被殺ニ夕ニ見者ハ朝ニ被レ殺、今妾等顏色不秀レ加以情性拙之、若威儀言語、如毫ニ毛不レ似ニ王意ニ、豈ニ爲レ親乎、是以不能ニ奉命ニ、遂ニ遁テ以不レ聽矣

播梭皇女も、織紝ふよりたる名あり、記ニ若日下王ニ作ル、ヲ、御兄と共ニ、河内国河内郡、草香ニ由りヲ、しニや○坂本臣、姓氏録ニ、坂本ノ朝臣、建内宿祢ノ男、紀ノ角ノ宿祢之後也、男白城宿祢、三世孫建日ノ臣、因ニ居賜ニ姓坂本臣ヲ、天武十三年ノ紀ニ、坂本ノ臣ニ賜レ姓曰ニ朝臣ト、按ニ坂本てふ

元年春二月戊辰朔、天皇爲ニ大泊瀬ノ皇子ノ、欲レ聘ニ大草香ノ皇子ノ、妹、幡梭ノ皇女ヲ、則遣ニ坂本ノ臣ノ祖、根ノ使主ヲ、請ニ於大草香ノ皇子ニ曰、願ハ得テ幡梭ノ皇女ヲ、以欲レ配ニ大泊瀬ノ皇子ニ、爰ニ大草香ノ皇子對テ言、僕頃患重病、不レ得レ愈、譬ハ如ニ物ヲ積レ船ニ、以待レ潮ヲ者、然レモ死ハ之命也、何ソ足惜ムニ乎、但以ニ妹幡梭ノ皇女之孤ヲ而、不能ヤスカニシナザラクノミ易死耳、今陛下、不レ嫌キラヒタマハニ其ノ醜ニ將ニ滿

地名、諸国ニ多
シ、是レ和
泉国ニ在レ
ル、續紀、此六
ヲ、和泉国和泉
郡ノ人、坂本臣系
麻呂等、六十四
人、賜ニ姓朝臣、續
後紀五ニ、讃岐国人、右少史從四位上、坂本鷹野、請ニ除讃岐之籍帳、復ニ和泉舊、許
之、和名抄ニ、和泉国和泉郡、郷名坂本、佐加毛止と、○荇菜、和名抄ニ、妾字
をよめり、荇菜の字、詩ノ關雎ニ見エたり○押木珠縵、大神宮式ニ、妻塞ノ押木打
鋪、十二口と、ハ、ものならむ、知りがたし、珠ニて裝ひたる髮ニ、るべし○
立縵以下考ニ
し○讒言、新撰
字鏡ニ、讒ハ毀也
与已須と注せ
り、是ハ濁音ニ
よむべし、相撲

荇菜之數ニ、是甚之大恩也、何辭ニ命
辱ニ、故欲レ呈ニ丹心ヲ、捧ニ私寶名、押木珠
縵、一云立縵、又
云磐木ノ縵
附ニ所使臣根ノ使主ニ、
而敢テ奉獻、願ハ物雖ニ輕賤ニ納テ爲ニ信契ニ
於是根ノ使主、見テ押木ノ珠縵ヲ、感ニ其ノ麗
美ニ、以爲ニ盜己ニ寶ト、則詐テ之奏ニ天皇ニ
曰、大草香ノ皇子者、不レ奉レ命、乃謂レ臣ニ

集ニ、早苗ひき、
もそよおる
と、いふ田子も、
我ぞと袖も、ぬ
れとうらしも
○大草香皇子、
原本皇子を、天
皇ニ誤まり○
難波吉師も、蕃
種あらむ、北史
新羅傳ニ、其官
有ニ十四等ニ、
る、十四等ヤ吉
士と記し、東国
通鑑、新羅儒理
王ノ條ニ、記せば
もれぬべし、記ニ
和途吉師阿知

曰、其雖ニ同族ニ、豈以ニ吾妹ニ得レ爲レ妻ト耶、
既而留レ縵ヲ入レ己ニ而不レ獻、於是天皇
信ニ根使主之讒言ヲ、則大ク怒テ之起レ兵ヲ、
圍ニ大草香ノ皇子ノ之家ヲ而殺ス之、是時
難波ノ吉師、日香蚊父子、並ニ仕ニ于大
草香ノ皇子ニ、共ニ傷テ其君ノ死レ罪死ス之、則
父ハ抱ニ王ノ頸ヲ、二ノ子ハ各執テ王ノ足ヲ、而唱テ曰、
吾君無レ罪以死ニ之悲乎、我父子三
人、生事之死不レ殉、是不臣矣、即自

吉師とゆるる、百濟人あり、かうまむ、歸化の人等の官名を、姓ふして、云ふらへるゆ、姓氏録ふ、難波連、高麗国好太王之後也とゆ

刎之死於皇子尸側、軍衆悉流涕、爰取大草香皇子之妻中蒂姫、納于宮中、因爲妃、復遂喚幡梭皇女、配大泊瀬皇子、是年也太歳甲午

○自刎之死、此父子三人も、蕃種ふいあまど、皇国ふ生れたれむ、皇国の道ふ死たゆ、按ふ元禄の義士の中、武林唯七ハ狄種ふて、其父唯右衛門ハ、文禄の役ふ生捕らまし、其子ふ為ど、皇国ふ生まゆ、忠ふ死ゆ、博物志ふ橘渡江北、化為枳とゆ、真ふあるゆも○皇子尸側、原本子を落せゆ、例ふよて補ふ○中蒂姫を履中紀ふ中磯皇女ふ作ゆ、記ふ長田大郎女とあゆ、但雄略紀ふ、中蒂姫皇女、更名長田大娘皇女とゆ、通證ふ蒂、與蹄通用、和名抄羊蹄菜、和名之、蹄一作蹄云々、原本妻を毒ふ誤まゆ、集解ふ一本ふ據て、改たるふ從ふ

己酉十七日○二年春正月、癸巳朔己酉、立中蒂

眉輪王、記ふ目弱王ふ作まゆ、石炎螺ふ由ゆて負しふや

姫命、爲皇后、甚寵也、初中蒂姫命、生眉輪王、於草香皇子、乃依母以得免罪、常養宮中

壬辰九日、御年を洩せり、記ふ伍拾陸歳とゆ○菅原伏見陵、諸陵式ふ、在大和国添下郡、兆域東西二町、南北三町、守戸三烟、志ふ在贄來冢邑と注せゆ

三年秋八月、甲申朔壬辰、天皇爲眉輪王、見弑、辭具、在大泊瀬天皇記、乃葬菅原伏見陵、三年、後、

日本紀標注卷之十二終

上梓公行賛助

西村捨三　濱田甚兵衛
山内芳秋　近藤喜祿
廣岡久右衛門　山口源兵衛
平瀬龜之助　野口守敏
田中市兵衛　馬場幸治
玉手弘通　小泉清左衛門
名越愛助　吉田利兵衛
進藤嘉市郎　和田半兵衛
辻満伴　豐田文三郎
大浦彌三兵衛　龜岡善兵衛
山口善五郎　辰馬圭助
土川茂平　椿本莊助
古家彌太郎　小林林之助

内閣文庫

明治二十四年六月一日印刷
仝　年　六月二十八日出版

版權所有

版權登錄

著述者　大阪市西區北堀江上通壹丁目二十八番屋敷　敷田年治

發行者　仝　西區北堀江裏通壹丁目三十六番屋敷　小林林之助

印刷者　仝　東區伏見町通四丁目七番屋敷　武藤稻藏

弘賣書肆

名古屋　片野東四郎
東京　北畠茂兵衛
仝　原亮三郎
京都　出雲寺文次郎
仝　藤井孫兵衛
大阪　松村九兵衛
仝　梅原龜七
仝　鹿田静七

竹四郎　七月六日　翻刻

国立公文書館
National Archives of Japan